

『丸之内出火御登城御定図』

『丸之内出火御登城御定図』（原寸縦26.5cm×横37.5cm）は、江戸城近辺に火事が発生した時に老中・若年寄が緊急に登城する際の行動基準を、出火地点がどこかであるかによって区分けした申し合わせの図示である。

この図は、江戸城を中心にした画面の上辺はだいたい東南方向を指している。江戸の地図には西向きのものが多いのに本図がこうなっているのは、老中・若年寄の上屋敷が集中する大名小路・西丸下の官公庁街がちょうど中央の右肩あたりに来るようにアレンジしたからであろう。画面中央の折り畳み跡の線を真ん中から上へなぞって行くと、グリーンの一部（大名小路）に「阿部伊勢」という文字が見える。阿部伊勢守正弘は、ペリー艦隊の来航や安政大地震などの多難な時期に老中首座を勤めた人物。在任は天保14年（1843）から安政4年（1857）の逝去までと長い。その下方の逆さ台形のブロック（西丸下）に戸田山城守の名があるので時期推定の手がかりになる。この人物は弘化2年（1845）から嘉永4年（1851）まで老中職。尾張屋板江戸切絵図嘉永2年（1849）3月刊の『大名小路・神田橋内・内桜田之図』にも同じ所に記載がある。本図は嘉永初年頃のものである。

幕末の国難はまだまだ至らず。大江戸八百八町がまだしごくのんびりと太平を享樂していられた時代である。江戸はまだ小春日和であった。

右下隅には「売買禁」（非売品）と記してある通りこれは官版である。一對の竹筒型の中に、地域を色分けで区分して、次のような申し合わせ条項を定めている。グリーン：『此の色の場所出火これ有り候節は、御老中・御若年寄衆仰せ合わせこれ無く御登城これ有り候事』。オレンジ色：『此の色の場所出火これ有り候節は、御老中・御若年寄衆仰せ合わせの上、御登城これ有り候事』。出火地点により、無条件登城と連絡を取り合って判断した上で登城する場合とを区別してい

るのである。

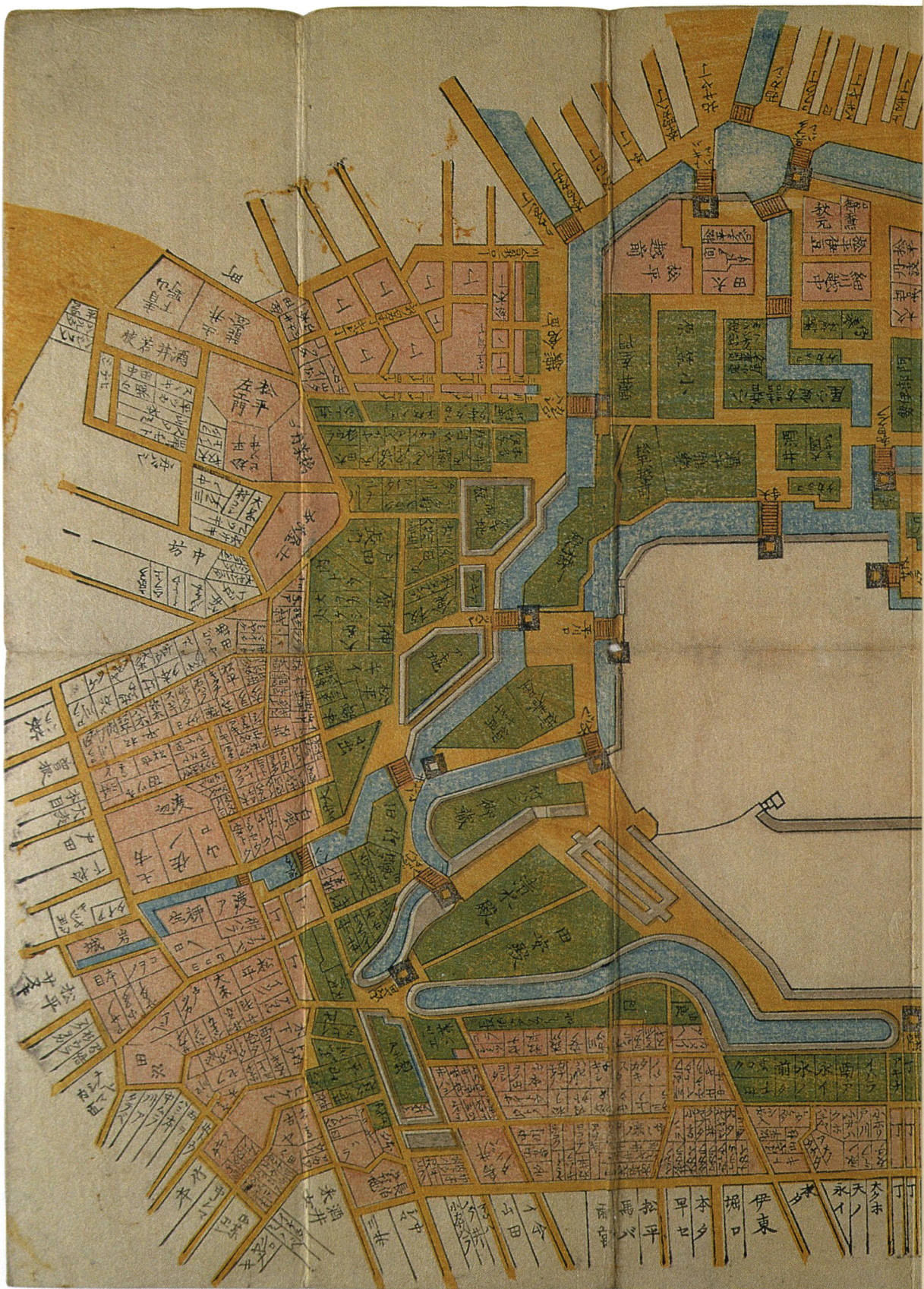
火事は平時における軍事であった。江戸は何度も繰り返して歴史的な大火に見舞われている。一旦、危急の事があつたらすぐお城へ駆け付ける、というのが將軍家お膝元の武門の倣いであった。事実、江戸城は幾度か類焼の憂き目に遭っている。明暦の大火の時などは天守閣まで焼けてしまい、その後、再建されることはなかった。

大火があると、老中・若年寄は至急登城し、町屋は町火消、武家屋敷は大名火消・定火消に任せ、大手組・桜田組の方角火消に指示して、飛び火や火の粉やで城内に火が燃え移ることを防ぐのに専念した。大火になるかどうかは、空気の乾湿やら風向きやらかなり時の運があるが、近火か否かはすぐわかる。無条件登城であるが、そこで何をもらって近火とするかの基準が必要になる。江戸時代はマニュアル社会だったのである。

「丸の内」とは、狭義には大名小路一帯をいうが、広義には江戸城内堀に囲まれた武家屋敷地をいう。本図は江戸城を中心の白丸として、それを囲んでその外側にグリーンの地域、さらにその外にオレンジ色の地域と三つの同心円で出来ている構図である。

画面の左肩の位置には小川町の旗本屋敷街が広がっている。小家が建ち並び、冬場などはこの方角からの北風は火事のときひどく危険だった。

江戸幕府の「危機管理体制」は常に大火を想定して作られていた。だが自然災害はいかなる予想をも越えて襲来するものなのである。本図の時期から七、八年後の安政二年（1855）の江戸大地震には、そうしたマニュアルは役に立たなかった。阿部伊勢守が城中にたどりついたのは地震から何時間も経ってからで、腰には脇差し一本というありさまだったと伝えられる。



『丸之内出火御登城御定図』／東北大学付属図書館所蔵

賣買禁

此色之場所出火有之候條者
市老中若年寄被仰令無之
市登城有之候支
此色之場所出火有之候條者
市老中若年寄被仰令無之
市登城有之候支

